

大学生に対する多様な生き方を示すキャリア教育の考察

—ライフキャリアに着目して—

国奥 真奈美

帝京短期大学 生活科学科

【抄録】

本研究の目的は、有給の職業生活に対するキャリア教育のみならず、人生のさまざまな役割に関連した実践の道筋であるライフキャリア教育により、大学生に対して多様な生き方の展望につながるかを検証することである。多くの課題が山積している今日の社会において、従来の有給ワークを中心とし生活におけるワークを付随的としたキャリア展望では、長生きに備えた人生への対応として不十分であると考えられる。

学生のキャリアに対する意識や人生の展望について探るため、学生のグループインタビューを実施した。また社会課題に取り組む社会起業家の講演の前後にアンケート調査を実施し、学生の意識変化について探った。

インタビュー調査の結果、さまざまな役割を並行的に進めながら自らのキャリアへつなげようとする複線的なキャリア志向は見られなかった。一方で、学生は潜在的に「何かやりたい」という考えを持っており、アンケート調査においても、キャリアアンカー指標のEC「起業家的創造性」およびCH「純粹挑戦」の値の高さより、「好きなこと、やりたいこと」や仕事と生活との調和を重視していることが明らかになった。

学生は「何かやりたい」志向がある一方で、生活のあらゆる場面における役割をキャリア形成につなげていくライフキャリアについては考えられていない。これまでの職業的なキャリア教育のみならず、多様な経験によりひろがるキャリアや、新たな働き方を展望させる教育も必要と考えられる。

【キーワード】 ライフキャリア、キャリア教育、キャリアアンカー

I. はじめに

人生100年時代を迎え、人々は生き方を自らマネジメントすることが求められている。柔軟に対応できるキャリアの在り方を考えることが必要とされるなか、学生は自分自身の能力ややりたいことを見据えて本当に自分の将来を描くことができるのであろうか。

日本の若者は、一般的に新規学卒者から正社員として一括採用され、長期的な雇用を前提に社会へ出ていくことができた。そのため学生は自らの能力やできることを踏まえて、自分自身の生き方を考えるというより、会社の規模や知名度などにより就業を見据える「就社」としての意識が高かった。しかし1990年初頭のバブル崩壊後、新規採用が見送られ始めたことを背景に、非正規雇用やフリーターの急増が社会問題

となった。大学からのスムーズな職業移行は出口を塞がれた状況となり、若者は終身雇用制度を踏まえた将来図を描きにくくなった。

一方、子ども・若者の変化として、職業人としての基本的な能力の低下や職業意識・職業観の未熟さ、身体的成熟傾向にもかかわらず精神的・社会的自立が遅れる傾向等、発達上の課題があり、社会全体を通じた構造的な問題があることが指摘されている¹⁾。社会に送り出す機能を持ち合わせる大学では、雇用や社会変化に合わせた時代のニーズに沿う柔軟なキャリア教育が必要なのではないだろうか。

Super.D²⁾によればキャリアの発達を生涯発達の中に位置づけており、「ライフキャリアレインボー」として、その役割をバランスよく統合することができれば、満足感や達成感の高い生活をもたらされるとしている。このモデルでは、

個人は「生活空間」(ライフ・スペース, 家庭, 学校, 地域社会, 職場が主なもの)と, 年齢と関連する「発達段階」(ライフ・スパン, 成長, 探索, 成立, 維持, 衰退)の2つの次元の中で, 複数の役割(子ども, 学生, 余暇を過ごす者, 市民や国民, 労働者, 伴侶, 家庭人, 親, 年金生活者など)を担いながら, それが虹のように互いが重なり合っており, どの時点においてどの役割の比重を高めていくのかという外的な要因に応じた自己決定に依拠していると捉えた。

日本の提言として国立教育政策研究所生徒指導研究センター³⁾によると, 「職業観」とは, 「人それぞれの職業に対する価値的な理解であり, 人が生きていく上での職業の果たす意義や役割についての認識である。」としている。「勤労観」については, 「勤労に対する価値的な理解・認識である。職業としての仕事や勤めだけでなく, ボランティア活動, 家事や手伝い, その他の役割遂行などを含む, 働くことそのものに対する個人の見方や考え方, 価値観であり, 個人が働くこととどのように向き合って生きていくかという姿勢や構えを規定する基準」としている。それゆえ生涯にわたる役割のなかで自己と社会を統合する人生役割とした「ライフキャリア」教育の必要性について問われているといえる。

ライフキャリアの観点からとらえたキャリア教育の研究が, 近年, 日本においても見られるようになってきた。西郷⁴⁾は, 現在行われている一般的なキャリア教育は「ワークキャリア」であり, 長い人生における仕事以外の様々な役割を含めたキャリアであるライフキャリアが教育ニーズであると指摘している。価値観が多様化した今日において, ライフの設計は, 人生のさまざまなリスク管理としてとらえることもできる。また小林, 高中⁵⁾の研究では, 結婚, 女性の出産や育児などのライフイベントと仕事及び生活全般を包括して表す「ライフキャリア」の概念を浸透かつ意識させるため, 「ライフキャリア教育」の実践の必要性を示している。

これまでの大学のキャリア教育実践の多くは, 就職支援や就業支援など, 職業生活における自己実現の側面に変調している⁶⁾。大学生に対するキャリア研究も数多く, それだけ学校から社会への接続における課題を有しているといえる。しかし人生のさまざまな役割に関連した実践の

道筋であるライフキャリアを, 高等教育機関である大学のキャリア教育として, 実証的研究はこれまであまりない。つまり大学のキャリア教育として, 職業生活の自己実現に向けた職業教育以外に, 生活におけるさまざまなワークの概念を有するライフキャリア教育に関する事例研究が少ない。

そのため本論文の目的は, 有給である職業生活に対するキャリア教育のみならず, 人生のさまざまな役割に関連した実践の道筋であるライフキャリア教育により, 大学生に対して多様な生き方の展望につながるかを検証するため, 次の2つの視点で捉える。一つ目は学生が「働く」ことや今後の人生設計およびキャリア展望をどのように考えているかを探ることである。二つ目は学生の意識としてさまざまな活動が人生の役割をふまえたライフキャリア意識につながっているのかを究明することである。

II. 方法

1. 調査対象者

(1) 調査対象者

本研究の調査対象は東京都内にある帝京短期大学(以下, 短大と略す)の1年生および2年生とした。短大の学科は生活科学科, こども教育学科, ライフケア学科, 専攻科があり, 「実学」を重視し, 社会的に需要の高い多様な資格取得に向けたカリキュラムにより学生を支援している。本研究では, 生活科学科生活文化コースの学生で, 文化演習科目を受講している約100名の学生を対象とした。

文化演習科目は優れた見識や行動を身につけ, 良き社会人及び人間となることを目的とし, 地域参加や地域貢献活動を主旨としている。主に, 地域のお花活動, お祭り参画, 区のオリンピック・パラリンピックなどを盛り上げる活動への参画など, 実践的な活動により学生の主体的な学びを促進させている。

(2) 調査対象者と筆者の関係

調査活動における筆者の立場は, 調査対象である学生からみると, 講師として「生活文化演習」に関わっていると認知されている。そのことは調査研究者の対象に対する「中立性」や「客観性」を考える際に留意されるべき点である。

しかし、その立場ゆえに、学生の活動に密接に接近し、考察することが可能であった。

また日頃から学生と関わる機会も多く、そのなかで学生から進路の相談を受けることも多々あった。学生は「働く」「働かない」の二択の選択肢で自身のキャリアを考え、かつ学生時代の多様な経験や活動が活かされるという展望が見えていないと考えられた。そうした関わりの中で、次世代を担う学生に筆者が伝えられることは何かと自問するようになり、産業界のニーズに合わせた有給ワークのキャリア教育のみならず、新たな働き方や社会的課題をふまえ、多様な生き方を展望するキャリア教育が必要なのではないかと考えるようになった。

2. 調査内容

(1) グループインタビュー調査

2019年7月および8月に半構造化インタビュー形式で、2名グループと9名グループの2回に分けて実施した。いずれのグループも女子学生で、各グループともにインタビュー時間は約70～80分程度であった。インタビュー内容は対象者全員の了承を得て録音し、逐語録にした。

(2) アンケート調査

1) 外部講師による講演

講演者として Choinaca 合同会社の代表である社会起業家の矢口真紀氏に依頼した。矢口氏が携わる Choinaca では「月3万円ビジネス」を提案するための講座を開いている。この「月3万円ビジネス」は、自分がやってたのしいことをビジネスにするもので、規模が小さく競争相手もないため思い切って行うことが可能とされている。小さい市場で行うため、必然的に地域限定ビジネスとなり、地域の人や場所といったリソースを活用することが求められる。またいくつかの「複業」も可能とし、これまでの働き方に対する提言となっている。地域の仲間と協力し、地域資源を活かしていくうちに、次第に社会とのつながりを感じられるようになり、地域課題についても向き合うようになるとされ、地域の商工会議所や自治体とも連携を図っている。

研究の調査を行ううえで矢口氏に依頼した理由は、次の二つである。①仕事に対する新しい視点 ②地域資源や仲間との連携を含めた社会的なつながりによる視点、この二つの視点によ

り学生に対する新たなワークの価値観の変容を促した。

学生に新たな視点獲得の機会としながら、有効なキャリア教育の方向性を探ることとした。そのため講演前後における学生の意識変化について分析することとした。

2) 調査票

調査の際に学生の職業観を把握する手段としてキャリア・アンカーのアセスメントを用いた。キャリア・アンカーは E.H.Schein⁷⁾ が提唱したキャリアに関する自己概念で、長期的な職業人生の中での自分のふさわしい職業上のイメージが形成され、個人の拠り所を「キャリア・アンカー」とした。キャリア・アンカーは次の8つに分類されている。

① TF (Technical/Functional Competence) : 専門・職能的コンピタンス

特定の仕事に対してこだわりをもちつつ、その仕事に対する才能と価値を置き、専門家であることを自覚して満足感を覚える。

② GM (General Managerial Competence) : 全般管理コンピタンス

経営管理や総合的な管理を行う職位を目指す。特定分野にこだわらず、組織全体にわたる結果に対して責任を持ち、重責を担うことに重きを置く。

③ AU (Autonomy/Independence) : 自律・独立
自分のやり方や仕事のペースが守られ、自分自身でその配分を決めることに価値を置く。

④ SE (Security/Stability) : 保障・安定
仕事の中身や組織の中での地位に興味をもち、雇用の安定、職務や組織での勤続などに重きを置く。

⑤ EC (Entrepreneurial Creativity) : 起業家的創造性

自己の能力だけで組織や企業を創造することを望むアンカーである。自分の価値を企業規模と会社の成功の度合いで測ろうとする。

⑥ SV (Service/Dedication to a Cause) : 奉仕・社会貢献度

仕事のうえで誰かの役に立っていることや、奉仕すること、世の中をよくしたいという欲求をもっている。

⑦ CH (Pure Challenge) : 純粋な挑戦
チャレンジや誰も取り組んだことがないこと

に挑もうとする。「挑戦すること」「挑戦し続けて進むこと」に価値を置く。

⑧ LS (Lifestyle) : 生活様式

仕事生活と生活との調和やバランスを求める。生活の主要な部分がすべてであり、全体的なまとまりを重視するため、柔軟なキャリア形成に価値をおく。

以上のアセスメントは各アンカー5項目ずつ40項目がランダムに並べられている。各項目を「まったくそう思わない」「そう思うこともたまにはある」「よくそう思う」「いつもそう思う」の1-4点で評価し、点数が高いほどそのキャリア・アンカーに価値を置いているとされる。40項目の各項目を筆者が2度読み上げ、学生にとって理解が難しいと考えられる項目については筆者の解説をまじえて進めた。なお、今回は全体的な傾向を把握することを目的とし、かつ授業時間や講演内容の制限などを考慮したため、最も言い表している5項目を選択することは割愛した。

3) 調査の概要

当日の参加予定者101名中、22名(退学予定者を含む)が欠席し、キャリア・アンカー指標の有効回答は79名、有効回答率は100%であった。起業に関する項目の有効回答数は74名であり、有効回答率は93%であった。

性別については、男性16名、女性60名、無記入が3名で、男女比は4:15であった。学年に関しては、1年が24名、2年が51名、無記入が4名で、学年比は8:17であった。

4) 調査の分析方法

分析は対象者の属性について単純集計を行った。次に、キャリア・アンカーの各項目を集計し、対象者全体の傾向を分析した。その後、自由記述式の起業に関する項目の授業前と授業後の変化について確認した。また、将来のキャリア、講演会の感想については集計を行い、整理した。

3. 倫理的配慮

アンケート表のフェースシートには、研究目的、個人を特定してデータを公表しないこと、個人情報保護について明記した。「アンケートの記入により回答に同意したものとする」とい

う項目を設け、口頭でも説明をしたうえで、インタビュー調査と同様に学生の承諾をもって実施した。

III. 結果

1. グループインタビュー調査の結果

(1) 幼いときの夢や希望していた職業

「社長」「保育士」「スポーツトレーナー」「臨床検査技師」「CA(キャビンアテンダント)」「女社長」など、学生は自分のやりたいことを意識して将来を描いている様子がインタビューからうかがわれた。中には、「高校の時から女社長になりたかった。で、それも女の子のための施設をつくりたくて、(中略)女の子の体調をケアする脱毛とかマッサージとかのお店と、あとちょっとしたカフェと、あとカウンセリングが付いてるビルを建てたいと思って...でも、その夢は破れて...女の子のためのビルを建てたいと思っていた。」と、職業に対して社会的な課題を踏まえた発言をする学生がいる一方で、テレビや周りの影響により自分の将来を描き、その理由を明確にしないまま将来像を描いている学生もいた。各々、学習継続の困難さや周りの助言により進路を変更しており、成長する過程においてなりたかった将来像は変化していた。幼いころから決意を明確にしながら突き進むというより、成長の過程において現実を踏まえながら、キャリアコースを変更しているようであった。

(2) 今後のキャリアと仕事観

調査対象者である学生のキャリア展望は、継続と非継続の二通りであり、仕事観は意欲的なものと嫌悪的な回答があった。それぞれの理由は以下のとおりである。

1) 継続型

「長く働きたい。お金のためではなく、自分の生きがいにしたい」「子どもが生まれる前の、結婚する前の会社で働いて、ただちょっと時間数だけ少なくしてもらったりして(働く)。「制度を使って、最初は店舗とかに配属されるけど、それが終わったら本社で時間を短くして(働ける)。「奨学金を返さなくちゃいけないから、16年、17年とか。貯金ないから(働く)」

継続型は仕事を「生きがい」として考える学生もいたが、奨学金のためにやむを得ず働く

いった現実的な生活を視野に入れて回答する学生もいた。また子育てに対する企業の制度を活用して働き続けることを展望しており、仕事と子育ての両立を視野に入れて継続的に仕事に向き合おうとする様子が見られた。

2) 非継続型

「収入に余裕があれば働きたくない。最初のうちは働いて、安定してきたら働かなきゃいいんじゃない？自分のものは自分で、パートで稼ぐ。」
「相手の収入によります。相手がもし社長とかほんと苦勞、こっちが働かなくて苦勞しないんだったらそりゃ働かないし、家事やるけど、相手が普通のお給料だったら私も働く。」など、結婚相手の収入額や子どもの人数次第で自分が働き続けるかどうかを決めるなど、状況によって自身自身の働き方を変えようとしていた。

3) 意欲的な仕事観

「楽しんで働いている人は楽しそう。いきいきしている人はすごいいきいきしている。(略)丸ビルとか丸の内とかめっちゃいきいきしているOLさんがいて、おおうって、かつこいいなあって思う。キャリアウーマンになりたいなあって...」と、仕事に対して意欲的かつ憧れをもって将来を描いている学生の意見が聞かれた。

また自分の裁量で仕事を行うことを見据えて、成長ととらえている意見として、「(仕事)覚えるまでは大変だけど、覚えてからは自分でやりたいようにできるから、それはそれで周りにとられないでできそう」があった。

こうした意見は少数であり、ほとんどが以下のように仕事に対して嫌悪的であった。

4) 嫌悪的な仕事観

多くの学生から聞かれたのは、「仕事したくない」という意見であり、嫌悪的にとらえている学生が多かった。例えば、「仕事なんてしたくない。できればフリーターで、もう何もしたくないいよね。仕事して、お金稼いで、何がおもしろいのって思う。なんだろう、お金って何？」この学生は、インタビュー当時、すでに小売業の就職が決まっていた。就職の志望動機を尋ねると「なんとなく」と強い志望ではなかったようであった。ただ、地域活動のなかで模擬店の係を担当した際に、子どもとの関わりがきっかけで接客業をやりたいと考えたようであった。しかし「苦痛であり、楽しみは一つもない」と考えているようで、かつ「これからおんなじ職で

一生働いて、一生稼いで、死んでいくんだなって感じ。」と、終身雇用制度や一つの組織に縛られることに毛嫌いしていた。「もうなんかみんな毎月、同じずつお金くれればいいじゃんって思う。」など、逃避的な志向であった。

また仕事に対する不安な気持ちとしてほかの学生から聞かれた意見として「身を削って... 過酷なイメージ」「いやあ、大変そう、いやだ、働きたくない。」「(電車の)人身事故とか多いじゃん。就職っていうか、社会人に対していいイメージが全然ないから...」と、過酷な仕事のイメージがあり、かつ仕事により過大なストレスがかかると想像していた。

さらに職場の人間関係に対する不安も聞かれた。例えば、「その職場で、もし、合わない人って絶対いると思うんだけど、働く達成感よりそっちの苦痛の方が強くなっちゃったら、がんばれるのかなあとかね。」「今までは友達がいるから学校に行こうとか、モチベーションになったけど(友達関係)なくなるから。」「人間関係にも仕事内容にも全部に悩みができそう。」「身を削って... お局的存在の人になんかすごしごかれそう。」など、仕事の継続は職場の人次第といった様子であった。

仕事の裁量に対する期待があり、仕事を意欲的に捉えていたり、オフィス街を闊歩する姿に憧れるなど、外面的な部分に魅力を感じている様子であった。

一方で仕事を嫌悪的に感じている学生は、仕事を「身を削って働く」のような自己犠牲と同義と考えているようであった。昨今の「ブラック企業」や「長時間労働」など社会問題化した働き方に対して、学生は敏感に感じ取り、将来の不安につながっている様子であった。また一つの企業や組織で働き続けることを不満に感じていた。高度経済成長期の有給ワークが生活の全てとして働き、「働く以外に何もない」という虚無的な感覚で働くことを捉えている様子が見られた。

(3) 地域の貢献活動について

短大の地域貢献活動について自分事として捉えられているかを探ったところ、概ね「面倒だった」と答える学生が多かったが、面倒な活動の中にも、学生なりにその楽しさや意義を見出している回答も見られた。例えば「正直面倒くさ

いんだけど、やってるときはなんて言うの？やった、お疲れっていう達成感はある。」というように、多少の面倒さのなかから達成感や楽しさについて述べられていた。

また「会議にでたあとデータとかまとめることをやって、連絡がきてまとめ直しとかやるんですけど、時間とかかかって提出に間に合わないことあるんですけど、でもギリギリ間に合ってる、なんとか間に合ったとかありますね。大変ですけど。」と、演習活動の困難を乗り越えたからこそ味わう喜びについて語る様子も見られた。

地域の人々とのふれ合いについては、「自分が経験したことの無いこととか、地域の人とかありがたい人生経験とか（中略）60代か70代くらいで大学に入ったとか... 気象予報士の勉強をしたりとか、すごい勉強熱心なおじいさんで...」
「私にとっては新鮮な経験で、アルバイトとかの経験が一切したことがなかったので、その呼び込みとか... 子どもとか苦手だったんだけど、回数を重ねていくうちに子どもと接しているうちによかったし、新規の立ち上げができたからよかった」「結構大変だった。人見知りだった。知らない子と一緒になったり、知らない大人と、しゃべんなきゃいけないんで... そんなときは緊張しました。今、思えば、終われば楽しかったかなあ〜と...」というように、世代を超えた触れ合いにより会話が生まれ、学生の多様な価値観の醸成へとつながっているようであった。

(4) インタビュー調査から

インタビュー調査では、学生が描くキャリア展望や、仕事に対してどのように考えているかを捉えることを目的とした。そのなかで大学の活動として行われている地域貢献を含めた実践的な活動についてインタビューした。

インタビュー対象者が女子学生であったこともあり、学生が描くキャリアは必ずしも有給ワークキャリアのみならず、家庭生活についても語られた。結婚しても働き続けることを展望し、自らの有給ワークのキャリア構築を考えている学生がいる一方で、家庭生活に重きを置いている学生も一定数いた。家庭生活に重きを置いている学生は、自身の有給ワークキャリアについてパート労働などにより家計の足しになる程度とし、高度経済成長期に形成された性別役割分業意識が影響している内容であった。

また仕事や働くことについては、悲観的かつ嫌悪的な意見が多数あった。学生は「働くこと＝苦役」と考えているようで、「働くこと」が人生の悲哀であるような口ぶりであった。それは過酷な現場で過大なストレスにより心身が病むようなイメージにつながっていた。さらに一つの企業や組織に継続的に働くことにより、飽きてしまうのではないかと不安に感じているようであった。人間関係が全てのように考えており、楽しく働きたいと情緒の安定が継続的に働くことへの条件であった。

一方で、大学における地域貢献活動について尋ねたところ、活動しているうちに楽しさや達成感を感じられるようになったが、そうした活動が今後の人生においてどのように活かされるかまでは考えられていなかった。

学生のキャリア意識として、「働く」と「働かない」という2択の単線的なキャリア志向のみが描かれており、人生においてさまざまな役割をワークとしてとらえ、そのワークを並行的に進めながら、自らのライフキャリアへとつなげようとする複線的なライフキャリア志向は見られなかった。

学生に対するキャリア教育として、さまざまな役割のワークとして地域貢献活動などがあり、その課題に向き合うことによりキャリア形成につながっていることを教示することが効果的であると考えられる。

2. アンケート調査の結果

(1) 対象者全体のキャリア・アンカー結果

全体・男子学生・女子学生別にそれぞれの低位項目の数値を、Table 1に示した。その結果、対象者全体のキャリア・アンカーを確認すると、CH「純粋な挑戦」が13.89と一番高かった。その次にEC「起業家的創造性」の13.32、GM「経営管理能力」の12.89、LS「生活様式」の12.70、SV「奉仕・社会貢献」の12.27、AU「自律・独立」の12.23であった。一番低い数値を示したのは、SE「保障・安定」で11.20であった。男子学生に関しては、EC「起業家的創造性」およびCH「純粋な挑戦」がともに14.88と一番高かった。一番低い数値を示したのは、SE「保障・安定」で12.63であり、CH「純粋な挑戦」が高いという点においては、全体と同様の傾向であった。女子学生では、CH「純粋な挑戦」が13.75と一

番高かった。一番低い数値を示したのは、SE「保障・安定」の10.85であり、男子学生および女子学生ともにCH「純粋な挑戦」が高い傾向、SE「保障・安定」が低い傾向が見られた。(Table 1)

上記の結果から考えられることは、研究対象者にとって将来のキャリアは、保障や安定などのような安定性よりも、何らかの挑戦を行うことや問題・課題に対して向き合う意思があるものと考えられる。特に、男子学生に関しては、EC「起業家的創造性」の数値も高いことから、将来的に何らかの起業を希望していることが考えられる。全体としては、学生は保守的な未来予想ではなく、挑戦的なキャリアを歩みたいという願望があると言える。

(2) 授業前後における意識変化の結果

講演の前後で学生の意識においてどのように変化したかを測るために、「起業」という視点によって分析することとした。学生は「働くこと」が「雇用されること」であるという意識に結びつきやすいと考えられた。しかしライフキャリアの観点では、人生の役割の連続性とし、その役割から得られた知識や経験を活かすことと捉えると、地域のリソースを活かしながら小さく起業することも可能となる。そのため学生の新

たな視点獲得の機会として捉えられるかを探ることにした。

1) グループ分けの結果

まず、次の視点で「授業前に記述された主な感想」と「授業後に記述された主な感想」のグループ分けの指標 (Table 2) を作成した。

a:「積極型」はもともと起業に対する意識が高く、授業後においても強化されたと考えられるグループである。b:「願望型」は、起業に対する興味はあるものの、その方法がわからないが、授業後は「できる」と心理的に強化されたと考えられるグループである。c:「変化型」は、起業に対する興味がない、また「できると思えない」という消極的な姿勢から、授業後に「思える」「できるかもしれない」「興味がわいた」など講演内容が心理的な部分に影響を与えたと考えられるグループである。d:「消極型」は、講演前、講演後ともに心理的な変化が見られなかったグループである。e:「消失型」は、起業したい願望はあったものの、講演後に起業に対する願望を失ったグループである。f:「可能型」は、起業しようとは思わないが、起業できると考え自分の能力については何らかの展望を示しているグループである。g:無効回答は、どちらかまたは両方が書いていない、または意味不明

Table 1. 対象者全体のキャリア・アンカーの結果

	TF	GM	AU	SE	EC	SV	CH	LS
全体数	79	79	79	79	79	79	79	79
平均	12.00	12.89	12.23	11.20	13.32	12.27	13.89	12.70
標準偏差	2.38	2.68	2.31	3.00	2.22	2.06	2.47	2.59
男子 学生数	16	16	16	16	16	16	16	16
平均	13.50	14.81	13.63	12.63	14.88	13.00	14.88	13.75
標準偏差	2.87	3.30	2.94	3.70	2.55	2.55	2.70	2.81
女子 学生数	60	60	60	60	60	60	60	60
平均	11.58	12.38	11.87	10.85	12.93	12.10	13.75	12.52
標準偏差	2.15	2.37	2.07	2.79	2.00	1.94	2.47	2.59

なものとした。

なお、今回は学生の自由な発想を引き出すために、選択肢による項目は作らず、自由記述式とした。

講演前後の「起業」に対する学生の意識変化

についての結果は、(Figure 1) のようになった。

全体としては、授業前に「思わない」「できない」など否定的な回答を示していたものの、授業後には「やってみようと思った」「できるかもしれない」「挑戦してみたい」「興味をもった」

Table 2. 授業前後の「起業」に対する意識変化指標

グループ	授業前に記述された主な感想	授業後に記述された主な感想
a : 積極型 (n=8)	「思う」「できる」	「思う」「できる」
b : 願望型 (n=3)	「思う」「やり方がわからない」	「できる」「やれる」 「やってみようと思った」
c : 変化型 (n=43)	「思わない」「できない」	「できるかもしれない」 「挑戦してみたい」 「興味をもった」
d : 消極型 (n=17)	「思わない」「できない」	「思わない」 「難しそう」 「できるかわからない」
e : 消失型 (n=2)	「できそうと思わないけど やってみたい」	「できない」
f : 可能型 (n=1)	「思わない」「できる」	「思わない」「できる」
g : 無効回答 (n=5)	どちらか一方、または両方が書かれていない、 もしくは不明なもの	

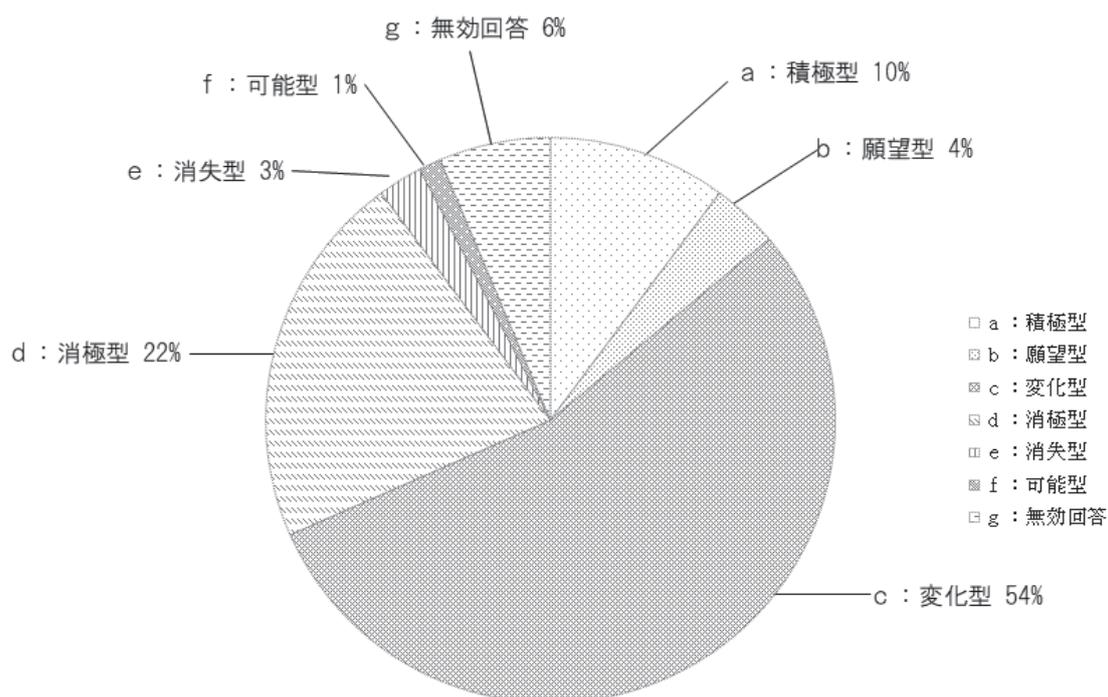


Figure 1. 授業前後の「起業」に対する学生意識の変化 N=79

など肯定的な捉え方に変わる変化型が54%と過半数を超えた。講演が直接的に学生の意識を変化させ、何らかの働きかけにつながっていたことが読み取れる。

代表的な回答として次のようなものがあった。

・「月3万円で自分のやりたいこと、好きなことを、ビジネスとして立ちあげて、稼ぐというはすごくやりやすいし仲間もいるから何でも協力し合えるし、とてもいい仕組みだなと思った。」

上記のように仲間との連携について興味を示す回答が目立った。また意欲関心においては以下のような回答も見られた。

・「とても自信があるわけじゃないけど、授業前よりも興味が出てきた。」

・「自分でもできるんだと思えた。」

授業前から「できる」または「したいとは思いますが、方法はわからない」から「できると思った」など、起業に関して前向きに捉える回答を含めるとおよそ7割に近づいていた。

消極型は22%であり、「やらない」「やりたくない」などの回答と合わせるとおよそ26%となった。代表的な回答としては、次のようなものがあった。

・「起業への興味がふえました。大変なことも多いと思うけど好きなことができる良さがわかりました。できそうだと思っていたけど、思っていたより、大変そうだなと思ひ難しそうだなと思ひました。」

・「起業してみたいと少しは思っただけど自分にできそうとは思わない」

消極的な回答の中で目立つのは、「かっこいい」「素敵」だと思うものの、「自分にはできそうにない」というスキルや方法について不安だとする意見があった。

消失型は3%であり、代表的な回答としては、次のようなものがあった。

・「起業への興味がふえました。大変なことも多いと思うけど好きなことができる良さがわかりました。できそうだと思っていたけど、思っていたより、大変そうだなと思ひ難しそうだなと思ひました。」と変化していた。

可能型は1%であり、以下の回答であった。

・「あまりしたいとは思わない。できると思う。」

以上のように、社会起業家の講演により、学生自身が「自分にもできるかもしれない」と将来に対して展望が変化していると考えられた。

起業に関して前向きに捉える回答を含めるとおよそ7割という結果から、「働くこと」が「雇用されること」と同義という考え方の変化が見られた。

(3) 講演の感想の結果

最後に、講演の感想について記述形式にて回答を求めた。ほとんどが講演によって考えが変わったことがうかがえる内容であった。それらをカテゴリーに分け、代表的な意見をまとめた結果が以下のとおりである。

1) 価値観の変化

「価値観の変化、多様性についての認知」としてまとめた。全体的に「価値観が変わった」「こんなものがあるんだ」など、学生にとっては新たな認識につながっていると考えられる意見が見られた。例えば、「自分はつい最近内定をいただいたばかりなのですが、やりたいこともなく、自分が少しでも活躍できそうな場所にとりあえず、就職しなければ、と思い決めました。その後今回のお話を聞いて、こんな考え方もあったのかととても興味を持ってました。もし将来自分にも子どもができて何かやりたいと思うようになったとき、月3万円ビジネスを利用したいなと思いました。」と、就職を目指してきたけれど、こういう活動を知ったことで、何かやりたいと思えたということであった。

就業に対して否定的な意見が変化しているものもあった。例えば、「アルバイトをしていてやりたくない仕事でも給料をもらっているからしかたないと思っただけ、就職しても同じだと思っただけ、これからの時代これではいけないと思った。収入の多さも大事だけど自分のやりたいことを仕事にして、それを生かしていけるようになりたいと思っただけ。」などのように、就業に対して希望を見出せていなかったものの、このような活動があることにより、働くことに前向きに考えられるようになっていく様子が見られた。

2) 地域との共生

地域のなかで生きていきたいという願望や地域に対する愛着と考えられる意見を中心にまとめた。

「自分たちの街は第3者が変えるのではなくて、その街に住む当事者達自身が、変えよう！変えよう！という気持ちが一番大事なのではな

いかと、この講演会を通して感じる事ができた」「地元は今でこそ人気になったけど、まだまだ人がいない悲しい現実もあると思うので、いつか地元に貢献できることをしたいと思った。」このように地域の課題に対して前向きな意識に変えていたことは、特筆に値した。学生は自分の地元に対する愛着があり、何とかしたいと考えていた。

上記の意見の他には「自分が何かをしたいと思いたったら、すぐ行動することのできる場所があることを今回初めて知ったので、自分の居場所、地域貢献、町づくりなど、コミュニティが作られていくことができるのが素敵だなと思いました。」「自分がいいなと思う場所で出店できれば町自体もうるおってくるし、経済も回っていくこと。」などのように、地域に何らかの貢献意識があると言えた。

3) 仲間との協働意欲

仲間との協働意欲についても多くのコメントが見られた。「自分一人の特技とか趣味だったら仕事にするのは低抗があるけど、仲間の特技とかと力を合わせたら何でもできるかもしれないなと思った。」「誰かを笑顔にする仕事はとてもやりがいがあると感じた。自分一人ではなく、仲間がいるから心強いというのもあるなと思った。」などのような意見が記載されており、仲間との協働意欲が見られた。

また「何かをやるには仲間作りが重要だと思いました。仲間同士で消費のサイクルを回してお金を回す場が構築されていて、何かを始めるにはうってつけの環境だと思います。」「仲間の力をつかうのが一番いいということがわかりました。」など仲間同士のサイクルを好都合であるととらえていた。一方、「とても明るく楽しい会社、コミュニティーだと感じました。こういう所で仲間を作って自分がやりたいことを仕事にできたら、とてもいいなと思いました。」などのように、学生の今後のキャリア意識のなかでも見られた、「楽しく」「やりたいこと」の意識がここでも見てとれた。

IV. 考察

本研究の目的は、有給である職業生活に対するキャリア教育のみならず、人生のさまざまな役割に関連した実践の道筋であるライフキャリ

ア教育により、大学生に対して多様な生き方への展望につながるかを検証することであった。そのため次の2つの視点でとらえた。一つ目は学生が「働く」ことや今後の人生設計およびキャリア展望をどのように考えているかを探ることとした。二つ目は学生の意識としてさまざまな活動が人生の役割をふまえたライフキャリア意識につながるのかを究明することであった。

一つ目の視点では、学生は終身雇用制度をふまえた「就社」の意識が強く、一つの組織に縛られるイメージを持っていた。将来のキャリア形成においては、女子学生は性別役割分業意識により、「働く」と「働かない」という2択の単線的なキャリア志向のみが描かれていた。それゆえ人生においてさまざまな役割を並行的に進めながら、自らのキャリアへつなげようとする複線的なキャリア志向は見られなかった。一方では、願望として「好きなこと、やりたいこと」が、学生の展望するキャリア形成に影響していると考えられるが、その「好きなこと、やりたいこと」の具体性までは考えられていなかった。

二つ目の視点では、全体的にワークのとらえ方が狭義であり、多様性は見えてこなかったが、社会起業家の講演により、学生の価値観や考えが変わったなど意識の変化は検証された。こうした講演により、学生の「自分にもできるかもしれない」という展望となり、多様なライフキャリアに対する意識につながると考えられた。こうした変化は一時的なものである可能性は否めない。しかし上述したように、学生はやりたいこと志向があるものの、何をやりたいかまでは自己認識できていない場合が多い。自分の可能性を内省する機会により、自分にもできるかもしれないという展望が見えたところで、ライフキャリア教育の教示により意識変化へとつなげる可能性もあるため、さらなる研究が望まれる。

今回の研究においては今後の課題もみえてきた。対象者が短期大学生であり、この対象者をもって全ての大学生に適用できるとまでは言えない。筆者が講師として学生に接近し、考察することができたゆえの研究である。そのため「中立性」や「客観性」においては留意が必要である。加えて、研究対象者に女性が多く、数値が偏って出ている点においても明記しておきたい。そのため諸条件を合わせた結果についてさらに検討が必要であろう。

さらに社会起業家による講演内容がよかったために、多くの意見が出た可能性は高く、筆者も期待していたことは否めない。そのため、多くの意見が出されたということもあり、結果に影響を及ぼした可能性はありうる。しかしながら、学生に働きかけるコンテンツを十分に検討し、かつ適切に資源が投入されれば、学生の意識に変化を与える可能性の検証という点では、一つの結果として提示しておく。

我が国は世界でも類を見ないスピードで少子高齢化、人口減少が進んでいるため、現在の雇用環境を維持するためには女性や高齢者の労働参加が欠かせない。社会的な課題に対しても国頼みの政策だけでは立ち行かない状況であり、一人一人が課題に向き合うことが重要だ。そのため、未来を担う学生が社会的変化にともなうワークの意識転換を踏まえ、人生における役割の組み合わせや、多様な生き方を展望することはこれからの社会を創出することに寄与する。

人生とワークキャリアは密接に関わっており、ライフとキャリアの連続性として、さまざまな活動がその後の人生における達成感につながることを学生に示す意義は大きいと考えられる。

なお、今回の論文に関して開示すべき利益相反状態はない。

【文献】

- 1) 文部科学省中央教育審議会 (2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について 文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2011/02/22/1302048_1.pdf
- 2) Super,D. (1980) A life-span,life-space approach to career development.Journal of Vocational Behavio.16,282-296
- 3) 日本学術会議 (2010) 大学教育の分野別質保証の在り方について 日本学術会議 Retrieved from <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf>
- 4) 西郷正宏 (2014) これからの日本社会におけるキャリアデザインー ソーシャル・キャリア・マネジメント (SCM) の提言ー 経営管理研究 (4), 85-90
- 5) 小林文邦, 高中公男 (2019) 持続的な女性活躍推進の為のライフキャリア教育の必要

性 第10巻第1号

- 6) 河崎智恵 (2011) ライフキャリア教育における能力領域の構造化とカリキュラムモデルの作成 キャリア教育研究, 29, 57-69
- 7) Edgar.H.Schein (1990) Career Anchors : Discovering Your Real Values. Jossey-Bass/Pfeiffer
金井壽宏 (訳) (2003) キャリア・アンカー

A study of diverse way of living and career education for college students

—a focus on life career—

Manami KUNIOKU

Department of Living Science, Teikyo Junior College

[abstract]

The purpose of this study is to examine whether college students can have perspectives of diverse lifestyles by getting not only a career education for paid professional work life, but also a life career education which tells practical ways relevant to various rules of a whole life. In addition to the paid work career, a life career education based on the ideas of life work career is necessary for college students, who will be responsible for the future society, to live positively and independently.

In order to figure out how college students think about their careers or life perspectives, group interviews were conducted to the students. Also, questionnaires were carried out to present a career to the students before and after a lecture by a full-time worker dealing with social issues, and changes in students' understandings or perceptions of a career were examined. As a result of the interviews, none of the students have thoughts of a career in which they build their career by playing various roles at the same time. On the other hand, the students potentially have thoughts of "want to do something", and from the result of high values of Entrepreneurial Creativity (EC) and Pure Challenge (CH) of the career anchor index in the questionnaires, it was found that the students put emphasis on balancing "what they like and what they want to do" with their work and life.

While the students have thoughts of "want to do something", they do not think about a life career in which building a career from playing roles in various circumstances in their daily life. In addition to giving the conventional career education focused on working, making students think about a career being broadened by a variety of experiences may enable students to have a prospect of a new work style.

[Key words] Life career, Career education, Career anchor